

草枕

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1908) 「新小説」
参考：松尾芭蕉『奥の細道』(1702)
立松和平と行く奥の細道 心の旅
「仙台放送」 (2000-)
出演：立松和平
出射由佳

智に働けば角がたつ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。

『草枕』冒頭のパロディをこころみる。

埋立地を歩きながら、こう考えた。

智に働かなければバカになる。情に流されなければ人でなし。意地を捨てれば意気地なし。

まさにその通り。文豪漱石は智に働き、情に流され、意地を通したが、神経衰弱と胃潰瘍に悩まされ、「兎角に人の世は住みにくい」と嘆いた。それから先は？ 思いだせない。筋はほとんど忘れてしまった。

あらためて『草枕』の古本をとりだして読みはじめたのは年号が昭和から平成へと変わった一九八十年代末、私が五十歳のころだ。

「住みにくさが高じると、住みやすいところへ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画(え)ができる」。

はて、そうだろうか、私は考えこんだ。

どこへ越しても住みにくいとは私も悟ったが、それだけでは詩は生まれないうし、画もできない。芭蕉や漱石は詩や画を残して五十歳で死んだ。バカはまだ死なない。どうすればよいか。

とりあえず、読書を再開することにした。多くは望めないが、若い頃、読みそこなって未練が残っている本、たとえば『草枕』というわけだ。



草枕

映画文学人生論

詩がわかるためには、わかるための余裕のある第三者の立場、非人情の立場にいなければならないと語り手の余（画工）はいう。第三者の立場に立てばこそ映画は観て面白い、小説は読んで面白いという意味らしい。

これは若い頃の私には理解できず、五十歳のときでもよく理解できなかったことだ。映画や小説は登場人物に感情移入し、怒ったり、泣いたり、笑ったりすることによってカタルシス（日常生活の中で抑圧されていた感情が解放され、快感がもたらされること）を得る。カタルシスをもたらしてくれない作品は失敗作ではないか。

ところが、画工は「苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。余も三十年の間それを仕通して飽々（あきあき）した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ」という。だから非人情の立場をとるといふ。

芭蕉は『奥の細道』の旅で枕もとへ馬が尿（いばり）をすることさえ雅な事と見立て、「蚤虱馬が尿（しと）する枕もと」と詠んだ。なるほど、そういうことか。

しかし、あえて智に働いて、理屈をいえば、俳諧の笑いも余裕も美への関心も人情だ。そんな人情を温存して非人情と称するのはおかしい——と理屈をこね、角を立ててみるもおろかなり。

草枕ひっくりかえして寝る夜寒